呼応しあう関係をめざして

伊集院　理子

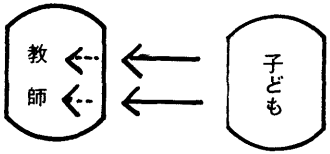
この雑誌の第93巻第7号に、私は、〝Sとのこと〟という文章を書いている。それは、以前に私が担任し、とても苦労をした子どもと私との関係について書いたものである。

――Sは何をしでかすか分からない、Sが荒れだしたら手に追えない、という考えがいつも私の心を覆っていた。一方、Sのような無理をしいられている子どもは、良い所も悪い所もまずは丸ごと受けとめてあげなければいけないという概念的な考えにも私の心は縛られていて、その両者の間を揺れ動いていた。今から思えば、Sが荒れだすとまずは力で押さえこんで、その後、慌てて「先生は、Sちゃんのことよく分かっているわ。Sちゃんは、○○したかったから、○○しちゃったのよね」などと、勝手に解釈したSの気持ちを押しつけていたように思う。（略）Sの本当の気持ちを受けとめるのではなく、今から思えば、Sに迎合してしまっていたように思う

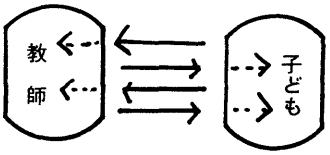
――こう書きながら、最後の〝迎合してし

まった〟という言葉では言い尽くせなかった自分の思いというのがずっと残っていた。

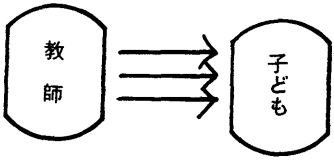
私は、Sのことをありのままに受けとめよう、受けとめようと思っていながら、少しも受けとめられていなかったのである。それは、何故なのか。その当時、私は、一方通行の形ばかりの受容（A図）を試みていたのだと思う。形だけの、いつも同じレベルの受容を心に描いていて、目の前のSときちんとしたやりとりが結べていなかったのではないだろうか。本来、人と人との関係というのは、どんな関係においても、一方通行では深まっていかないものである。関係が両方向性のものになって、はじめて、関係としての基盤ができ、そのやりとり（B図）を積み重ねていくことで関係が深まっていくのだと思う。人を受容するということも、A図のような一方向性のものでは決してなく、B図のような両



A図



B図



C図

方向性のやりとりが成立して、はじめて相手のことが受容できるのだろう。今から思えば、あの当時、私は自分がいたらないからSのことを受けとめられないのだと、自分自身を責め、A図の一方向性の矢印をいたずらに太くしていっては、うまくいかずに落ちこんでいたように思う。

教師として子どもと接する場合には、ややもすると、子どもを自分が導いていかなくてはと、C図のようになったり、又は、子どもを受けとめることが大事と、A図のようになったりと、どうしても一方向性の関わりに偏ってしまうことが、よくあることだと思う。

Sとのことがあって、私は、両方向性の関係、呼応しあう関係ということをつねに念頭において、子どもと関わるように心がけてきた。子どもが言ってきたことには、その場できちんと応える。こちらが応えたことに対しては、子どもにもきちんと反応してもらう。反応のない場合には、何らかの反応が引きだせるようにこちらの働きかけを色々と変えてみて、その子なりの反応を引きだし、それに対して又応えていく。こう書いてみると何だかとても大変なことをやっているようだが、ごくごく当たり前の人と人とのやりとりを、ていねいにきちんと成立させるように心がけているだけなのである。相手が子どもであれ誰であれ、人と人としてきちんとやりとりを成立させればいいのだと思えるようになったら、教師としての気負いがぬけて、とても楽になり、これまでよりも自然体で子どもと向きあえるようになったと思うし、子どもとのやりとりを楽しめる心の余裕がでてきたように思う。

両方向性の関係、呼応しあう関係を結ぶということは、前述した〝子どもが言ってきたことに対して〟といった、言語的なやりとりをきちんとすることだけではないと思う。言語以前のレベルでの呼応もとても大事だと思う。そのことは、昨年度一年間三歳児を担任して強く感じたことである。

――目と目の呼応――

子どもたちは、自分のことをいつもしっかり見ていてほしいと願っている。同じ子どもを見る目にも、子どもを受けいれて見守っている目と、監視している目がある。

廊下を歩いていた時、他のクラスの男の子がふざけて女の子の上に乗っていた所に通りかかったことがある。私は何をしているのかしらとただ見守っているつもりでいたが、その男の子が「何を見ているの」と私の目をとがめるようなことを言ったので、私は、ハッとした。今の私の目は、監視する目になっていたと……。ふとした時に、監視する目になってしまうことがある。監視する目には、警戒する目が返ってくる。見守る目には、見守られて安心している穏やかな目が返ってくる。そうすると、こちらの目も、もっともっとやさしくなれる。そんな目と目の呼応ができたらと思う。

――身体と身体の呼応が――

お帰りの時、玄関まで子どもを連れていき一人ひとりお母さまにお渡しする。次の順番の子どもと私が自然に手をつないで、一人ずつ「さようなら」をして、お母さまに手渡すことが多い。はじめはきっと私の方から手を差しのべて、それに子どもが応える形だったと思う。この頃は、子どもの方から手がのび

てきて、それを私がうれしく受けとめることがある。同じ手をつなぐのでも、色々な手のつなぎ方がある。自分の思う方向に無理矢理相手を引っぱっていこうとする手のつなぎ方。強引な相手に引っぱられるつなぎ方。手を差しのべると、すっと手を握り返して、柔らかくお互いの手の感触を感じあいながら握りあうつなぎ方。ふと手を差しのべた時に、子どもの柔らかい手が何のためらいもなく握り返された時、私は何よりもうれしく思う。中には、手を差しのべても、手が返ってこないこともある。まだまだその子とは呼応しあう関係になっていないのだと思い、自然にその子が手を握り返してくれる日までもうひとがんばりだと自分に言い聞かせている。

Y君が、危険な高い所に登っている。そばに寄って行って私が両手をひろげて差しのべると、Y君は、私の胸の中に自分の身体を預けてくる。私はY君の身体を柔らかく抱きしめ、下に降ろす。

H君が、庭で水遊びに余念がない。時間はもうお帰りを目前にしたお片づけの時間。「H君のこと抱っこしてお部屋に帰ろうかな」。H君は水遊びをやめ、H君のすぐそばにしゃがんだ私の胸の中に飛びこんでくる。やさしく抱きあげ部屋まで連れていく。「危ないから降りましょう」「もうお片付けだからやめなさい」といった言語的な働きかけではなく、身体と身体の呼応で響きあえたことがとてもうれしかった。

――一人ひとりとの呼応――

Rは、大人の中で育ってきた一人っ子の子どもである。Rは、大人のレベルでの会話の中で生活してきていて、ともすると、大人の言葉を聞き流すことを身につけてしまってい

るように思えた。淡々と独自の世界でマイペースに遊んでいる時と、ふとした時に衝動的に脱兎のごとくに困ったことをしでかす時との差が激しかった。そんな時、「急にRちゃんが○○して、びっくりしちゃった」などと諭すように言っても、こっちの耳から入ってそのままあっちの耳へ抜けていくという感じで、Rの心に全く届いていかないのである。そんなRに対して、Rのやりたいことを認め、それに呼応していくことを心がけてきた。何度も同じことを繰り返して伝えるのではなく、こちらの伝えたいことがRの心に届くような伝え方を色々と模索してきた。

Rは、衝立や柵や積木や椅子などを使って大々的な構築物をつくることを好んでした。ある程度自分の満足できるものが出来あがると他の遊びに移っていくということがよくあり、他の遊びをしている間もその構築物はそのまま残されたままにされるため、その構築物に使われている衝立や柵などを他の子どもが遊びの中で使いたくなることがよくあった。そういう時は、事あるごとに、遊んでいるRの所まで行って、他の友だちが使いたがっていることを伝え、それを使っていいか承認を求めるようにした。その間、友だちには待ってもらうようにした。はじめは、「ダメ」ということも多かったが、そのうち「衝立だけね」とか「柵だけね」とか言って、その使用を承認してくれるようになった。そんなことなどを通して、こちらとRとの言葉のやりとりがしだいにきちんと嚙み合うことが多くなっていった。

ある時、私が何かの用で廊下にいたら、部屋から大きな泣き声が聞こえてきて慌てて部屋にかけつけてみると、Rが泣いていた。ちょっとしたことでわざと大げさに泣いてい

るように思えたので、「Rちゃん、ちょっと大げさ」と言うと、ニッと笑って「エヘヘ」と言って泣きやんだ。小さい出来事であったが、Rとの間でそういうやりとり、呼応ができたことが私にはとてもうれしかった。

入園してしばらくは、すぐそばにいて話していても、Rの頭の上を私の言葉がむなしく通りすぎる感じがしていたのであるが、この頃では、少し離れたところからの私の発信もRはちゃんと受けとめてくれていると実感することが何回かあった。そうなってくると、近い所にいる時はもちろんのこと、遠くからのRの発信への私の感度もぐーんとあがってきていることが感じられる。

Rに対しては、Rとの呼応のあり方を色々と探りあててきた。他の子に対しては、また別の呼応のし方がそれぞれにあるのだと思う。一人ひとりの〝今〟と、呼応しあう関係をていねいにつくりあげていきたいと思っている。〝今〟と、今に力点を置いたのは、ともすればこれまでの子どもの育ちとか、こうあってほしいと願う子どもと呼応しようとしてしまうことが多々あるからである。一人ひとりの〝今〟と呼応しながら、子どもと自分とのやりとりを楽しんだり、味わいながら一日一日を大事に過ごしていきたいものである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）